

古代形容詞類型考察のための一視点

吉 田 光 浩

はじめに

古代日本語の形容詞語彙を幾つかのカテゴリとして捉える場合は、一般に情意性形容詞・状態性形容詞という二大カテゴリで把握されることが多いようである。しかしながら、この方法は、必要かつ十分な原理上の検討を経たものとは言えず、いずれにも分類し難い語が存在することや、この意味上のカテゴリと用法との対応関係が明らかにされていないこと等、問題点を幾つか指摘し得る。本稿では、古代形容詞研究の分野において、現在広く行われている、情意・状態の二大カテゴリをたてる方法について検討し、より分析的で有効と思われるカテゴリを考えるための、幾つかの手がかりについて考察しておきたい。

一 情意・状態カテゴリの有効性と限界について

従来、指摘されてきたように、情意性・状態性という二大カテゴリには、ク活用・シク活用という活用形式との対応が、かなりの程度で認められる。^{注1}すなわちカテゴリカルな意味の面からの区分に対して形態の面からの根拠が、少なからず与えられており、その意味では一応の妥当性をもったカテゴリのたて方であるといえよう。しかしな

がら、活用形式と意味との対応が崩れたとされている平安期の形容詞については、この方法では具体的な語を想定した場合に、十分な有効性を発揮できないという問題が生ずる。

例えば、「いたし(甚)」「いみじ」あるいは「あつし(暑)」「さむし」等を情意性・状態性のいずれのカテゴリで捉えるか。「とし(疾)」「はやし」「ひさし」「おそし」等は状態性のものであるのか。もしそうならば、「しろし」「あをし」等、色彩を表すような形容詞と等質のものと考えてよいのか。また、対象を評価的に捉える側面をもつ「めでたし」「みぐるし」等は、一般に情意性形容詞として捉えられているようであるが、主体の感情を直接表出する「うれし」「ねたし」等と同列のものとして考えられるか、等々、多くの語のカテゴリへの帰属について曖昧な場合がみられる。

このような問題点を指摘し得る原因を、我々は、情意性・状態性それぞれ定義や分類原理が明確にされてこなかったというところに求めがちであるが、本質的にはそれ以前の、より根本的な地平に立ち戻って考え直す必要がある。すなわち、分類という方法論自体に対する反省と、形容詞の意味のカテゴリをいわば主観性・客観性の二極対立の構造として捉えることに対する反省が必要と考えられるのである。^{注2}

例えば、先述のような、いずれかの枠に納まりきれない語について

「分類」という方法で対応するためには、厳密に言えばよりカテゴリーを細分化して、境界を幾つも設けなければならなくなるが、そうすると個々の語の意味の広さや多義性に対応しきれなくなるという矛盾が生ずる。したがって、カテゴリーの連続性を認めない「分類」という方法では、このような問題を扱うには限界があるということになる。

二 古代形容詞カテゴリーの連続性

このような問題に対応するためには、次のようなふたつの視点を取り入れる必要がある。

第一に、カテゴリーの連続性を前提とする方法論を採用することである。このような方法論の中には、例えばプロトタイプ論があり、既に関連諸科学の中で採用されて、一定の成果を挙げているようである。日本語研究の方面では、柴谷方良「主語プロトタイプ論」(『日本語学』第四巻第一〇号)や森山卓郎『日本語動詞述語文の研究』(明治書院・一九八五)等、既に現代語の研究の中に取り入れられており、注目されているものであるが、古代語研究の分野には、ほとんど適用されていないようである。これは、古代語の研究が言語の認知の問題を直接扱うことができる程、有効な資料に恵まれていないことにも原因があろう。しかしながら(例えば、G・レイコフの研究にみられるような)認知の問題を前面に据えたプロトタイプ論の導入は、現段階では難しいとしても、カテゴリーの連続性を前提とする方法論は古代語の研究においても、必要かつ有効とされるものと考ええる。

具体的には、各カテゴリーを代表するような、より典型的と考えられる形容詞をいくつか見出だして、他のカテゴリーの典型的な形容詞群と比較・分析することにより、そのカテゴリーの特徴を明らかにし、いわゆる類型(ここでは仮にこのように名付けておく)をたてることが考えられる。各々の類型には、特徴的性質を、いくつか見出だ

しておき、ある形容詞が、その諸特徴を量的にも質的にも、より大きく備えていれば、より典型的にそのカテゴリーを体现している要素であると判断するという方法が考えられる。最終的にたてる類型とその特徴的性質が決まれば、他の類型との連続相の中で、中間的な性格をもつ語を位置づけてゆくことが可能になるであろう。

このような方法によれば、理論的には、複数の類型の特徴を持ち合わせた語を見いだすことも可能であろうし、分類という方法では対応が難しかった語の多義性にも対応し得るであろう。この場合に問題となるのはどのような方法と基準をもとに類型を見出すかということと、類型相互の関係を一定の基準をもって測り得るかということであるが、その点についても今後、考察を重ねてゆく必要がある。

第二に、情意・状態といういわば二極対立構造として形容詞語彙の全態を捉えようとするのではなく、現代語において既に行われているように、より実態に即した、きめ細かな類型をたてることが必要であろう。近年では、現代語形容詞について詳細な分類を示された細川英雄氏の研究(『現代日本語の形容詞分類について』『国語学』一五八集)や、三田村紀子氏、藤田保幸氏の分類をもとに示された山口佳紀氏の四分法(性状形容詞・評価形容詞・感覚形容詞・感情形容詞)が注目されるが、依然として、情意性・状態性の二分法が広く支持されているように思われる。確かに、古代形容詞の中には、感情を表す形容詞のように明らかに主体個人の主観的な情意を強く感じ取り得るものと色彩を表す形容詞のように客観性が高いものとがみられ、それらは対立的に捉え得るのであるが、そのことが注意されるあまりに、従来より情意・状態のいずれのカテゴリーにもあてはまりにくい語をどのように位置づけるかという検討が十分でなかったことは否めない。したがって、このような語を含めた類型を考えることが必要となる。

三 古代形容詞類型考察の視点について

以上においては、形容詞の全態をどのように捉えるかという問題に対応するための、基本的な考え方について述べてきたが、現段階においては古代語形容詞の類型をたてるための客観的かつ有効な基準が、ほとんど見出だされていないというのが実状といつてよく、本稿においてその全てを解明し、完全な類型をたてるには到底至りえない。したがって、ここでは、平安期の資料に用いられた形容詞のなから、情意・状態の二分法では説明が付き難かった形容詞群を中心に、どのような類型をたて得るかという問題について検討しておくにとどめることにする。

この場合、意味・用法・形態のいずれの方向から見ても妥当と思われる類型を考えてゆることが理想的であるが、従来の情意・状態のカテゴリは、主に意味のありかたが形態(ク活用・シク活用)のありかたにある程度支えられていることに依拠するものであり、用法上の問題があまり顧みられていなかったと言える。したがって、ここでは、とりわけ用法上の検討に注意を払いながら、たて得る類型を考えてゆくことにする。

主な検討の資料は、既に別稿において、活用形の定量的調査を試みたことのある『枕草子』『源氏物語』『栄花物語』を中心とする平安期の和文資料であるが、どの作品にも同様に広く見受けられる用例については、主に『枕草子』のものを中心に示しておくことにする。なお、上記三作品についての調査テキストには、主に次のものをを用いた(用例の表記については適宜改めた部分がある)。

日本古典文学大系『枕草子』(岩波書店) 『源氏物語大成』(中央公論社) 『栄花物語 本文と索引』(武蔵野書院)

右の三資料の形容詞について、その用法の量的な検討を行ってみる

と、連用法がきわめて多く現れるものと、連体法・準体法が現れやすいもの、そして他の語と比較すると終止法が現れやすいもの、というように、主に三方向に広がりを見せており、各々の語は、用法上の偏りがみられるようである。(詳細については別稿を用意している)そのうち、従来の情意・状態カテゴリでは、量的にみてとりわけ連用法に卓越する語についての位置付けが難しいようである。

具体的には「いみじ」「いたし(甚)」等を挙げることができる。これらの形容詞は、その意味・用法のあり方から仮にカテゴリ名を程度規定の形容詞とする。無論この名がこれらの語の意味・用法の全容を包摂するものでないことは、予めことわっておきたい。

すなわち、「いみじ」には若干ながら、連体法「いみじき君達」(第八八段)や終止法「物のをりの扇、いといみじとおもひて」(第二五段)のような例もみられるが、これらの場合には程度を規定するだけではなくて、文脈から生ずる属性的意味を帯びている場合が多く、連用法で用いられた用例の場合と同一には考えにくい。そのうえこのような例は、程度規定に用いられていると判断し得る例と比較すると、わずかなものであるといえよう(実際には、程度規定の用例は、本来区別されるべき並列法のものと同判別が非常に困難である。しかしながら、例えば『枕草子』・『源氏物語』・『栄花物語』では、「いみじ」の用例の多くが程度規定の用例であると考えられそうである)。したがって「いみじ」の平安期における基本的な用法は、用言に対して副詞的立場で程度を規定することにあるといえる。

また、「いたし(甚)」「いたし(痛)」は一応別語として扱う)については、とりわけ動詞に対して副詞的に用いられる形容詞であることが知られており、『枕草子』・『源氏物語』・『栄花物語』のいずれにおいても八割以上の用例が連用法で用いられていることから、やはり「いみじ」の場合と同様に解し得るであろう。このように、「いみじ」「いたし」が程度を規定する用法に卓越するということは、とりまなおさず、語として副詞的性格を強くもつことの表れであると考えられ

る。元来、程度性を有することは形容詞の性質の一つであると考えられるが、これらの語のようにそのことを主要な用法とする語は、形容詞のなかでも特異な位置を占め得るものと言い得る。したがって、従来の情意・状態カテゴリーでは十分に捉え切れなかったこれらの形容詞のために新たな類型をたてる必要が考えられる。

一方「はやし」「とし」「ひさし」「おそし」は、情意・状態の区分のなかでは状態性のもので位置付けられるであろう。しかしながら、これらも「あかし」「あをし」などのような連体法や準体法で現れやすい他の状態性形容詞とは、用法の傾向がかなり異なっており、やはり、連用法の用例がきわめて多く現われる形容詞群である。ここでは仮に時間形容詞と名付けておく。

この語群が程度規定の形容詞と異なる点は、特定のモダリティと共起的に現れる傾向がみられるところである。

例えば、「はやし」には、次例のように「はやく・けり」の構文で用いられる表現法が、例えば『枕草子』の場合、一八例（語幹形も含む）のうち五例みられる。

- ・ 殿上より、梅のみな散りたる枝を、「これはいかが」といひたるに、ただ、「はやく落ちにけり」といらへたれば、（第一〇五段）

古代語のモダリティは、テンスとの区別をつけ難いことが知られているが、この場合の「けり」もモダリティの形式とみるべきものである。

同様の例は、『源氏物語』には、みられないものの、『栄花物語』には一例認められる。

また、語幹「はや」が、会話表現中において「はやのぼらせ給へ」（第一〇四段）のような命令のモダリティと共起する用法をもつ傾向が強いことも、これらの形容詞の特色を示しているものと思われる。これと同様に「とし（疾）」の場合にも、後続する特定の叙法と共に

起する傾向がみられる。

- ・ 「あな、うれし。とくおはせ」など、見つけていへど、さまざまじき心地して（第八二段）

- ・ これを、上の御前、宮などにとくきこしめさせば（第三三段）

この形容詞は、後続に命令・願望のモダリティと共に起する例が多く、『枕草子』では、六六例中、命令表現との共起例を一五例、願望（詠えも含む）表現との共起例を五例、見いだすことができる。

一般に時間を示す副詞は、客観的事態内部ではたらく、主観的なモダリティには関わらない傾向があるため、このような例は、あくまでも「呼応」ではなく「共起」にとどまる現象と解される。

一方、「ひさし」には、甲斐陸郎「源氏物語の文章と表現」において否定表現との共起関係が指摘されており、『枕草子』『栄花物語』にもそのように解釈し得る例がわずかながらみられるようである。

- ・ 昼つきた、縁に人々出でゐなどしたるに、常陸の介出で来たり。「など、いとひさしう見えざりつる」と問へば、（第八七段）
- ・ この一宮をこそいと久しう見ざりしか、（栄花・巻第八 はつはな）

否定は、客体的表現であり、モダリティとは認めない立場に立てば、このような例は、客体的な言表事態内部における共起現象と解し得る。いづれにせよ、以上のような、特定の文末形式と共に起する傾向は、時間形容詞に、とれないやすい性質と考えられるが、『枕草子』『源氏物語』『栄花物語』をみる限りでは、「ひさし」は、「とし」「はやし」の場合よりも、そのような傾向は弱いようである。

また、「おそし」については、さらに副詞的傾向が弱く、終止用法が比較的現れやすい形容詞であることは、既に別稿において述べたと

ころである。したがって、時間形容詞の類型をたてる場合に、もしその用法の典型を連用法の用例を基準に考えるとすれば、「とし」「はやし」は、その類型に最も近いところに位置しており、次に「ひさし」そして「おとし」の順にその類型から遠ざかり、比較的終止用法で現れやすい他の形容詞群の類型に近くなるものと考えられるであろうか。

このように、用法の範囲は各語によって若干ずれがみられるものの、やはり程度規定に用いられる形容詞と時間形容詞が、副詞的性格を強くもつことは注意されてよい。ただし、それぞれ新たな類型をたてる場合には、これらの語の性格が、各カテゴリーを特徴づけるものとしてどの程度有効であるかということをより深く分析してゆく必要がある。

次に「さむし」「あつし(暑)」など、感覚を表す形容詞について簡単に述べておく。古代語の感覚形容詞については山口仲美「感覚・感情語彙の歴史」(『講座日本語学』四・一九八二・明治書院)において取り上げられているが、このようなカテゴリーの設定は、古代語研究の分野においては、まだ十分に定着をみていないように思われる。

これらの語は、従来、状態性形容詞として捉えられてきたようである。その理由は、これらの形容詞の用例の多くが、準体法で用いられる、いわゆる「対象語」が句よりも語として文中に現れやすいため、連体法で用いられることが多く、色彩を表す形容詞「あかし」など属性形容詞と結果的に非常に似た様相を呈することが多いからであろう。

- ・ また冬のいみじうさむきに、うづもれ臥して聞くに、鐘の音の、ただ物の底なるやうにきこゆる、いとをかし。(第七三段)
- ・ いみじう暑きころ、夕すずみといふほど、物のさまなどもおぼめかしきに、(第二四段)

しかしながら、色彩等属性を表す形容詞は、対象語が文中に現れやすく、実体をもつ名詞をそれとしてとりやすいことに対して、感覚形容詞は形容詞全体のなかでも対象語の必要度が低いものであるという相違がみられ、また、「ほど」「ころ」などのような時期・時刻を表す抽象名詞に対して連体法で現れることが比較的多く、既に指摘が見られるように感情を表す形容詞と同様に、解釈のうえで感覚主体の人称制限が考えられるという点において、やはり色彩形容詞とも異なる語群であり、独立した類型をたてる必要がある。

そして、その場合には、連体法・準体法が現れやすい属性形容詞の類型および主語の人称制限が考えられる感情形容詞の類型との連続相を念頭に置く必要がある。

おわりに

以上、従来の情意性・状態性のカテゴリーでは捉ええ難いと考えられる程度規定の形容詞・時間形容詞および感覚を表す形容詞について、各々用法の異なりをおおまかに把握し、それぞれの類型をたてる必要性があることについて述べてきた。この他に、従来、情意性形容詞として捉えられてきたものについては、主語の人称制限のみならず感情形容詞と、そのような制限の考えられない評価形容詞に分けて別の類型を考へることができであろう。しかしながら、この両者の相違を古代語において用法の面から指摘することはかなり難しいようである。また、さらに、「あかし」「あをし」等の色彩形容詞と「たかし」「ほそし」「ふかし」等の空間把握の形容詞をそれぞれ類型としてたてるか、あるいは属性形容詞として一括把握するべきかを検討することも必要であろう。

今後、各々の類型の特徴的性質を明らかにして、客観的な基準を設けることができるようになれば、いずれとも判別し難い中間的な形容詞や複合形容詞についても、各々類型間の連続相のなかに位置づける

ことができるであろう。そしてそこから更に新たな類型を見出だすことになる可能性も十分に考えられるのである。

注1 山本俊英「形容詞ク活用・シク活用の意味上の相違について」(『国語学』三三集・一九五八・一二)参照

2 細川英雄「現代日本語の形容詞分類について」(『国語学』一五八集・一九八九・九)では、現代語についての詳細な分類の指標が示されており、言語認識の立場から主観的・客観的という従来の分類基準で形容詞を捉えることについて再検討の必要があるという見解が示されている。

3 拙稿「平安期和文形容詞の活用分析―因子分析の応用試論―」および「栄花物語の形容詞の活用分析」参照

4 西尾寅弥「形容詞の意味・用法の記述的研究」(秀英出版・一九七二)参照

5 拙稿「栄花物語の形容詞の活用分析」参照

〈参考文献〉

山本俊英「形容詞ク活用・シク活用の意味上の相違について」(『国語学』三三集)一九五八・一二

三田村紀子「形容詞の意味分類」(『奈良女子大学研究年報』一〇)一九六七・二

根来 司『平安女流文学の文章の研究』一九六九・笠間書院

東辻保和「古典感情形容詞研究の一視点」(『文学・語学』五六)一九七〇・六

西尾寅弥「形容詞の意味・用法の記述的研究」一九七二・秀英出版

西尾光雄「源氏物語の形容詞について」(『東京女子大学日本文学』五一)一九七九・二

甲斐陸郎『源氏物語の文章と表現』一九八〇・桜楓社

山口仲美「感覚・感情語彙の歴史」(『講座日本語学四』一九八二)明治書院

寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』一九八二・くろしお出版

山口佳紀『古代日本語文法の成立の研究』一九八五・有精堂出版

柴谷方良「主語プロトタイプ論」(『日本語学』第四卷一〇号)一九八五・一〇

細川英雄「現代日本語の形容詞分類について」(『国語学』一五八集)一九八

九・九

田中茂範「認知意味論―英語動詞の多義の構造」一九九〇・三友出版

吉田光浩「平安期和文形容詞の活用分析―因子分析の応用試論―」(『国語語彙史の研究』第一集・一九九〇)和泉書院

吉田光浩「栄花物語の形容詞の活用分析」(『日本文芸研究』第四三卷二号・一九九一・七)

G・レイコフ『認知意味論』池上嘉彦・河上誓作他訳・一九九三・紀伊国屋書店